

第45回社会思想史学会大会セッション
19世紀イギリスにおける教養と一般教育の思想

日時：2020年10月24日（土） 10:00～12:00

司会 小田川大典（岡山大学）

趣旨説明 藤田祐（釧路公立大学）

第一報告

崎山直樹（非会員・千葉大学）「近代的大学の誕生とリベラル・アーツ」

第二報告

藤田祐（釧路公立大学）「T・H・ハクスリーの教養教育論」

討論 小田川大典（岡山大学）

セッションでは、まず司会の小田川会員から全体の導入として19世紀前半のオックスフォード大学で教育に携わったコプルトンの教育理念が紹介された。コプルトンによれば、有用性に基づく教育は社会を分断するのに対して、古典を軸とする教養教育こそ人格全体を涵養することで社会を統合する教育なのである。次に司会による報告者の紹介が行われた。

趣旨説明

藤田による趣旨説明では、崎山報告と藤田報告に共通する文脈であるヴィクトリア時代のイギリス社会と社会状況に対応する教育の展開について報告された。まず議論の前提として、ヴィクトリア時代が、いわゆる「長い18世紀」の名誉革命体制から20世紀型の現代社会にいたる過渡期にあたり、身分制社会と国教会体制を前提にした〈公〉が再編成された時代と捉えられる。1801年に多数派カトリックに対するプロテスタント優位体制が確立していたアイルランドとブリテンが合同して連合王国が成立し、1820年代末からは審査法撤廃とカトリック解放を初めとする一連の改革で名誉革命体制で〈公〉から排除されていた人々をどのように包摂していくのかという問題が浮上する。特にアイルランドでは、カトリック解放後のアイルランドでどのようなかたちで新しい〈公〉を立ち上げるのが課題になっていた。崎山報告はこのような課題に対する応答であるトマス・ワイズの教育論を取りあげる。ブリテンでもアイルランドでも、新しい〈公〉を担う知識エリートを養成する新しい大学教育と、新しい〈公〉に民衆を包摂する普段である新しい公教育をどのように展開するのか議論になった。信仰の揺らぎに対する宗教運動と並行して伝統大学では古典教育を軸とする教養教育の重要性が主張され、民衆に対する初等教育では国家がどのように公権力に関わるべきなのかも含めて新しい公教育をめぐる議論が高まった。藤田報告で取り上げられるT・H・ハクスリーの教養教育論は1870年の教育法に結実する公教育をめぐる議論の文脈で行われたものである。

崎山直樹「近代的大学の誕生とリベラル・アーツ」

崎山報告では、以上の趣旨説明にもある19世紀前半のアイルランドの状況、そして19世紀前半の連合王国における新しい高等教育の展開を受けたトマス・ワイズの教育論がリベラルアーツと職業教育という軸から考察された。連合王国成立を受けた19世紀前半のアイルランドでは、連合王国の他の地域と対等な権利や制度をアイルランドに付与すべきという同時代に勃興したりベラリズムとも軌を一にした要求が出された。1829年のカトリック解放に続いて1835年のアイルランド都市法人法の改

正によりカトリックが排除されていた都市自治にカトリックも参入できるようになり、イングランドにおける大学新設の流れも受けてカトリックが学べるアイルランドの大学が求められた。

アイルランド出身のカトリックであるトマス・ワイズは、下院議員として連合王国における政治の表舞台で活躍し、1830年代後半からアイルランドにおける教育構想を展開した。そこでは、住民全体を対象とする国民教育制度（初等教育）、職業教育を含めた中等教育、カトリック中産階級の創出と育成を目指す専門教育重視の高等教育という実学よりの近代教育が構想された。ワイズの構想は、連合王国からの離脱を求めるリピール運動が一段落した後、1840年代半ばのクィーンズ大学構想に結実した。アイルランドに新しい大学を設立する構想をめぐって、リピール運動の中核であったリピール協会は、宗派の垣根のない混合教育を求めるグループとカトリックによるカトリックのための教育を求めるグループとの間で内部対立が激化し、分裂につながった。前者の方向性で1845年にクィーンズ・カレッジ法が成立し、アイルランドの4州のうち、アルスターのベルファスト、マンスターのヨーク、コナハトのゴールウェイにカレッジを設立し、ダブリンの学位授与機構がつなぐ連合大学であるクィーンズ大学が創立された。特徴としては、正規の学位は取れないものの工学と農学という実学の課程がすべてのカレッジに置かれた点があり、争点になっていた宗教教育は、混合教育ではなく、カトリック、国教会、長老派が個別に行うことになった。古典教育に加えて近代言語や統計学などの新しい学問が教育され、1860年代以降は官僚その他の専門職へのキャリアを見据えたカリキュラムが展開され、セミナーや実験を取り入れた現代的な大学になっていく。

クィーンズ大学設立後、カトリックの不满に応えるかたちでカレン大司教を中心にカトリック大学の設立構想が推進され、オックスフォード運動を経て国教会からカトリックに改宗したジョン・ヘンリー・ニューマンが招聘される。ニューマンを学長とするアイルランド・カトリック大学では、『大学の理念』にまとめられているニューマンの教育理念に基づく高等教育が模索され、カトリックのためのリベラル・アーツの教育が展開された。ただし、古典教育だけではなく、同時代のカトリックが求めていた近代科学の教育を含めたりベラル・サイエンスの教育も目指された。

以上のようなアイルランドにおける教育制度の整備における共通の観点は、教育を通じた国民統合であった。また、自由という観点から考えると、社会上昇を伴わないリベラル・アーツの教育だけでは自由を得られず、社会上昇の手段となりうる専門職へのキャリアを開く近代知である、リベラル・サイエンスの教育がアイルランドのカトリックが求めたものであった。アイルランドのカトリック・エリート養成をどのようなコストの負担でどのように行っていくのかという問題設定で、以上のような教育をめぐる議論や教育制度の整備が展開していったのである。

藤田祐「T・H・ハクスリーの教養教育論」

藤田報告では、まずハクスリーの教養教育論を考察する観点が提起された。一つ目は下層中産階級から知の力で階級上昇を果たして学会や政府の要職を務めるまでになったハクスリーのキャリア、二つ目は科学的自然主義と呼ばれるハクスリーの科学思想、三つ目は、科学的自然主義を支えるハクスリーの世界観である。科学的自然主義は、超自然／自然という図式で科学研究の対象を自然に限定し、超自然を対象とする宗教および神学と科学研究を切り離す、言い換えれば教会の科学研究に対する介入を排除する考え方である。ハクスリーの世界観については、法則に支配された自然という自然観が核になっていたが、自然と社会の関係をどのように捉えるかが重要である。自然と社会を連続的に捉える見方をしていたハクスリーは、晩年には自然と社会を対立しているという見解に移行した。

前者はスペンサー思想との共通性がみられ、後者はJ・S・ミル「自然」の影響が考えられる。このような自然観の移行に対応して、教育も人間の動物性への対抗という意味を帯びていった。

また、ハクスリーの教養教育論を取り巻く政治コンテクストとしては、まず第一に、身分と人間関係を基盤としていた従来の社会を変革すること、科学の世界では科学の専門化・専門職化を推し進めることで〈科学人〉という新しい知識エリートが牽引する社会を築くというハクスリーの野望があった。また、科学研究を担う主体も、自然神学という枠組みで科学研究を担っていた国教会聖職者やジェントルマン科学者から、国家から援助を得た科学研究機関で給料を支払われて科学研究に従事するプロの科学者へと転換がはかられた。このように、ハクスリーは国家が科学研究や公教育を推し進める役割を担っていると考えており、この点で最小国家を理想とするスペンサーと対立していた。このような政治の文脈でハクスリーの教養教育論を考察する必要がある。

南ロンドンにあった成人教育機関で1868年に行われた「教養教育——どこに見いだすべきか」という講演で、ハクスリーは自らの教養教育論を展開する。まず公教育に対する批判に対して反論した後、ハクスリーはチェス盤の比喻で教養教育を説明する。この比喻では、チェス盤が世界で、駒が自然現象で、チェスのルールが自然法則である。ハクスリーによれば、擬人化された自然がチェスの対戦を通じて道徳的な意味をもつ自然法則を教えるのが自然の教育で、これを補完して自然の知識を授けるのが人為の教育である教養教育である。この時点のハクスリーは、スペンサーと同じように、自然が人間のよき行為には褒美を与えて悪しき行為には罰を与えるという意味で自然法則が道徳的な意味をもつと考えていた。このような教養教育観に基づいて教養教育で教えられるべきカリキュラムが検討されている。

1880年にバーミンガムのメイソン・コレッジ（バーミンガム大学の前身）で行われた「科学と教養」という講演では、古典に偏った文芸教育を批判した上で、社会科学を含む意味での自然科学の知識が産業の発展にとって有用である点を強調している。しかしながら、ハクスリー自身は、知識自体に純粋な価値があるという教養教育論とは一線を画しながらも、実学としての技術教育よりも今で言う理学に当たる科学教育の重要性を主張してきていた。さらには、スペンサーと同じように社会現象も自然法則に従って生じると論じ、自然の知識は社会現象を考察する上でも必要である点を強調している。

実学として位置づけられている技術教育に関するハクスリーの議論は、いわゆる帝国主義の時代におけるヨーロッパ諸国間の競争が激化するのに応じてニュアンスが変わってくる。1877年の「技術教育」という小論では実学である技術教育の前に自然科学の基礎を学ぶことの重要性を主張していたハクスリーが、10年後の1887年に行われた講演では、国家間の競争をマルサスの人口圧に由来する生存競争と捉え、競争に勝ち抜く手段として技術教育の重要性を強調している。同じ時期からハクスリーは上述した自然観とは対照的な道徳的な意味をもたない自然という自然観を主張し始め、技術教育を含めて公教育を認めない個人主義に対して自らの自然観を根拠に批判を向ける。このような自然観は先にみた教養教育論が前提としていた自然観とは対極にあり、時代の変化に対応するかたちで自然観だけでなく、科学の素養を育てる科学の基礎教育を重視する立場から、より実学としての技術教育を重視する立場へと踏み出したと言えるのかもしれない。

討論

討論者の小田川会員から、崎山報告に対しては、アイルランドにおける職業教育と一般教育との緊張関係について質問があった。この質問の文脈としてイングランドで見られた実利を求める職業教育

が個人の関心を狭めて利己的にするという議論が説明された。また、藤田報告に対しては、自然観の変化についてハクスリーに影響を与えた可能性のあるJ・S・ミルの「自然論」との関係について質問があった。自然をcultivateすべきというミルが「自然論」で展開した世界教養論のようなものをハクスリーも考えていたのかという質問である。

崎山氏の回答は、イングランドとアイルランドの状況は異なるというものであった。アイルランドでは、政治経済学におけるダブリン学派に代表されるように国教会のトリニティ・カレッジにおいても近代知が重視され、一般教育と職業教育と個人の陶冶が一直線につながっていた。国教会側もカトリック側も、職業教育対一般教育という図式ではなく、アイルランドを豊かにするという目的を追求する上でのどのような教育が必要なのかという共通の課題に取り組んでいたというのが崎山氏の認識であった。

藤田の回答は、まずハクスリーの自然観についてはミルの「自然論」に影響された可能性が高いというものであり、世界教養論については共通性はあるが異なる印象を受けるというものであった。1888年に発表された「生存競争」でハクスリーは、ミルが「自然論」で展開した二つの定義を同じように自然を定義しているので、ミルの「自然論」を読んでいる可能性が高い。また、「進化と倫理——プロレゴメナ」では自然の中につくられた人為の状態である庭というアナロジーを用いているのでミルとの共通性があるが、ハクスリーの方が自然に対して人間が無力だという印象が強いという指摘がなされた。ただし、人間が自然に働きかける上で自然の知識が重要だという立場では一貫していたとも述べられた。

質疑応答

質疑応答では、まず坂本達哉会員から、崎山報告に関してエドモンド・バークの信仰についての確認がなされ、藤田報告に対してはハクスリーのヒューム論との関係についての質問があり、両名からそれぞれ回答がなされた。また、後藤浩子会員からは、ワイズの教育理念に対するフランスの教育理念からの影響と、職業教育対一般教育という対立図式が19世紀アイルランドの教育を論じる上でどこまで有効なのかという点について、質問があった。前者についてはワイズの教育理念にフランスからの影響は見られるが、クィーンズ大学構想においては別の人物経由でドイツからの影響の方が大きかったと回答があった。後者については、指摘の通り、職業教育対一般教育という対立よりも、新しい教育理念と古い教育理念の対立、教育を通じてどのような人材を育成するかをめぐる対立という観点から考えた方がよいと述べられた。遠藤泰弘会員からは、ワイズがどうしてあのようなキャリアを歩めたのかという質問があった。崎山氏からは、ロンドンの社交界でいろいろな有力者で出会って能力が評価されたからではないかと推測されると回答があった。続いて、ワイズの資料が、結婚相手の実家であるボナパルト家の所蔵で見られないのはなぜかという質問があり、崎山氏からは公開されていない理由の一つとして家庭問題があるのではないかと推測が示された。

セッション終了後、重田園江会員からハクスリーの自然観について藤田への質問がメールであった。ハクスリーの自然観が変化した要因についての質問に対しては、報告でも言及したJ・S・ミルの影響、同時代のイギリスにおける社会状況、画家のジョン・コリアと結婚していた娘の死などの要因が考えられると回答した。また、変化する前の自然観が18世紀的な自然観と結びつけられるかという質問については、ハクスリーの自然観にスペンサーが影響を与えているとすれば、スペンサーが受容した理性主義プロテスタントの自然観を18世紀的な自然観と結びつけることは可能だと回答した。